

昭和六十三年度

春季公開講演要旨

昭和六十三年
五月二十日開催

清 徹 の 響

— 仏教とキリスト教の音楽に想う —

本学教授 岩 田 宗 一

本日は仏教音楽とキリスト教音楽を例にとりまして、本来、宗教音楽とはどのような音楽を指して云うのか、それぞれの宗教はどのような音楽を理想としているのか、といったことがらを日頃私が考えていましたことや、国内外のあちこちに行って触れてきました宗教音楽を紹介しながら、皆様と一緒に考えてまいりたいと思います。

私はもともと西洋音楽畑の者であります、なぜこういう仏教とか宗教音楽に興味を持つようになったかと申しますと、西洋音楽の歴史に興味を持って勉強しております過程で、どうやらヨーロッパ音楽というのは、キリスト教とは切っても切り離せない関係で歩んできたこと、とくにその出発点は正にヨーロッパ音楽史をそのままキリスト教音楽史と云い換えていいような密接な関係で進んできたということを学びまして、翻って我が国の音楽の歴史に想いを馳せたのであります。そこで、ヨーロッパ音楽史が歩んできたのと同じような意味で日本の音楽史にも必ずや仏教が大きな役割りを果たしたに違いない、少くともそういう時期があったに違いないと考えまして、そのことを確かめる努力をしていますうちに、今度は仏教音楽そのものに大変こころを惹かれ、仏教音

楽とは一体何かというところへ入っていったのであります。

日本には沢山の仏教の宗派がありますが、それぞれの宗派には営営として儀式音楽の声明の伝承がありますが、多くの寺院を訪ね歩くうちに分ってきたのであります。声明とは、今日では仏教法要儀式で声に出される全てを指して云っております。しかし本来はもっと狭い意味で用いていました。この声明の調査の結果は数年前に法蔵館とコロンビアから出しましたレコード二十八枚と七冊の解説本『声明大系』にまとめることができました。これは東京国立文化財研究所と私の恩師の京都市立芸大音楽学部の片岡義道先生に私を加えた共同の仕事であります。

この『声明大系』によりまして、日本においてどのような声明が、どのようにして唱えられているかということが把握できるようになりました。ところが、それまでもお手もの資料に掲げましたように、国外のあちこちで宗教音楽の調査をしていましたこともありまして、キリスト教音楽にも大きな興味を持つようになり、仏教音楽とキリスト教音楽とを対比してみたいと考えるようになったのであります。

この辺でまず声明の実例をお聴きいただきたいと思ひます。この声明曲は京都大原に伝わる天台宗の声明で、「諸天漢語讀」といいます。楽譜は譜例1を御覧下さい。

ひきつづきましてキリスト教音楽の中で最も古い伝統を持ちますグレゴリオ聖歌の例をお聴きいただきたいと思ひます。この録音は六年前にこの大谷大学から約三ヶ月半の間、研究のためヨーロッパへ行かせていただいたときに、中部ドイツのマリーアラーハ修道院のミサで行なったものであります(譜例2)。このような曲が毎日曜日のミサなどで歌われているのであります。この楽譜

譜例 1 『声明大系』 3 (1983年法蔵館刊) 33頁より。



譜例 2 『Graduale Triplex』 (1979年版ソレーム刊) 58頁より。



は四線譜で、音符も角ばっていて今では見られないものですが、ヨーロッパ音楽史のある時期には一般に用いられたものであります。現在はキリスト教音楽にだけ生き残っているものであります。この二つの曲は当然のことながら、音楽的には大変異なっているとお聴きになったと思います。

このうち、グレゴリオ聖歌といえますのは、ローマ・カソリック教会の正式の典礼聖歌でありまして、西暦五九〇年から六〇四年までローマ教皇でありましたグレゴリウス一世が、当時ほぼヨーロッパ全域に広がったキリスト教勢力とその象徴である教会の儀式を統一するために、その儀式で歌う聖歌を歌集に編纂したのに始まるとされています。その後歴代の教皇によって曲目は増大され、一三世紀ごろまで発展をとげたのであります。これらを総称してグレゴリオ聖歌と呼んでおります。この音楽はいまお聴きの通り、ふしは一本だけで伴奏ありません。そのふしも宗教的とは云え、時代が進むに従ってヨーロッパの人たちにとっても物足りなく感じられたことでありましょう。そのことを示すかのように、彼らはこのグレゴリオ聖歌のふしに、いくつかの別の高さの音を重ねる工夫を早くから始めたのであります。云い換えれば、今日あるようなヨーロッパ音楽の多重性と云いますか、多声音楽は、実はこのグレゴリオ聖歌を基盤として始まったと云ってもよいのであります。

皮肉にも、この多声化が進むに従ってこの聖歌は徐々に衰退し、十八世紀ごろにはほとんど一般の教会では用いられなくなったようでありました。それにかわって重厚な合唱音楽が全盛を誇るようになったのであります。しかし、やがて音楽家や音楽学者の手によって復興が計られ、伝統的な儀式や音楽を特に重んじる修道院

に伝えられていた唱法が大いに参考とされました。とくにフランスのソレームとドイツのボイロンの修道院のそれが重要視されましたが、なかでもソレームの唱法を基にして今世紀初めにビオ十世の布告により復興せられたのであります。このとき出された聖歌集がヴァチカン版と呼ばれ、今日も全カソリック教会が用いているものであります。

ところで、話が急に広がりますが、このグレゴリオ聖歌が成立した七世紀ごろ、ヨーロッパ以外の地域がどのような状況だったかを見てみますと、まず日本は聖徳太子の時代であります。すなわち日本が仏教を大陸から受容した時代であります。中国は隋・唐の時代にあたります。それから東ローマのビザンチン帝国は、ササン朝ペルシャと死闘を続けているという状況であります。さらに重要なことは、マホメットが丁度そのころに在世中であつたことです。彼の建てたサラセン帝国はその後、領域を北アフリカからやがてイベリア半島にまで広げまして、その地域にすでにあつたキリスト教会はイスラムの支配下に置かれることになるのであります。

なぜここまで話を広げたかと申しますと、歴代の教皇が曲目を加えていったグレゴリオ聖歌の中には、このイスラム支配下のスペインで音楽的にイスラム音楽の影響を受けた聖歌、これをモサラベ聖歌といいますが、このような聖歌も含まれていることや、オリエンタル音楽の影響を強く受けた聖歌もグレゴリオ聖歌集に入っていることをお話したからであります。それだけではなく、あります。

グレゴリオ聖歌が成立し、曲目がふえていく時期が丁度、中国では唐の時代にあたっています。洛陽や長安は現在新たな注目

を集めていますシルクロードのターミナルとして経済的にも文化的にも一大国際都市を形成していたのであります。また宗教的にも仏教が中国古代の儒教や道教と肩を並べた時代でもあったのであります。さらにこの時期には中国にキリスト教も入ってきていますし、ゾロアスター教も入ってきています。そのうえサラセン帝国から使者がやってきていることでも分かるように、イスラム教の影響も避けられないという、宗教の上でも中国は正に国際的な舞台となっていたのであります。

このように見えますと、仏教の音楽とキリスト教音楽とが、今日を除いて歴史の上でこれまで全く接触したことがなかったと考えることの方が、むしろ不自然なことではないでしょうか。研究者の中にはこの両者はどこかで接触して、場合によっては互いに影響を与え合った時期があったのではないか、という壮大なロマンを語る人もあります。しかしこのことを証明することは今日ではまず不可能なことで云わねばなりませんし、荒唐無稽な話として片付けられています。私はこのようなロマンは一つぐらい残しておいても良いのではないかと思うのであります。といいますのも、本日のテーマ「清徹の響」というのは、実はそのことと関係のある題でもあるのであります。

ここで、まず仏教がどのような音楽を理想的な音楽と考えていたかということに話を進めたいと思います。そのことを調べる一つの方法として、仏教の經典の中に音楽に関してどのように書かれてあるかということを手がかりに考えてみたいと思うのであります。そしてその音楽についての記述を、いくつかの經典から抜き出してみたいのであります。そうしますと、西暦元年前後からインドで完成されて行く大乘仏教と、それ以前の仏教としては、音楽

に対する態度がずい分異なっていることが分るのであります。大乘仏教以前ではおおむね音楽は否定的であります。その理由は僧侶たちの修行の大きな妨げになる、涅槃を求め、静寂の中で冥想したり思考したりすることの邪魔になると云うのであります。従って僧たちの集団生活の場に音楽を持ち込んではいけません。經典があります。しかし世間一般の音楽までは否定していません。むしろ仏への供養のために音楽を用いてもよいと述べているものもあります。

ところが大乘仏教になりますと、音楽に対する態度はがらりと変わってまいります。極楽浄土の様子を詳しく述べた例えば無量壽經では音楽は天人や天女といった天上の住人たちによって、仏・菩薩の供養や徳を讃えるために奏でられるとあります。音楽は極楽浄土と天上で奏でられるものを最高のもの、理想的なものとするということでもあります。しかし、この天上の住人たちが音楽をするという発想自体は大乘以前の仏教經典にも見えますし、さらに古くはバラモン教の教典であるヴェーダの中に見られるものであります。その中では梵天という名で表現されています。音楽はつねに梵天が演奏し、天上から聞えてくるものであるという思想があるのであります。大乘仏教の經典ではこの天上が極楽浄土へ、梵天が天人へと引きつがれているのであります。

さて、バラモン教は今日、ヒンドゥー教の中に生きつづけており、その教典ヴェーダはヒンドゥー教でも根本聖典の一つとされております。これらは、ふしをつけて朗誦されますが、釈迦の時代も例外ではありません。おそらく釈尊の説法も弟子たちによって、同じようなふしをつけて暗誦されていたのではないかと思われまます。私は六年前にインドのベナレスでこれを聞くことができ

ました。それをお聴きいただきたいと思ひます(諸例省略)。

ここで先ほども申しました無量寿經というお經に、音楽に関する記述がどれだけあるかということを見て行きたいと思ひます。

まず、「無量寿如来が法を説かれるときには、求道者〓菩薩たちは七種の宝石でできている講堂に集まり、そこで説法を聞く。すると四方から自然に風が吹き起り、あまねく宝石の樹樹を揺り動かし、五種の音声の流れ出る。一切の天人たちは皆さまざま種類の音楽によって供養し」ということがございます。また「アーナンダよ。かの仏国土に生れた求道者たちは皆、花や楽器や歌や音楽によって仏を供養しようとするならば」と云い、また釈尊が弟子アーナンダに、かつて優れた求道者がいて、その以前にさらに八十一人の如来がいたと、語るところにその如来の名が出てきます。その中に「梵天の音声」「梵音声をよるこべる」「山の王にして音声自在な」「梵音」といった名があるのであります。これらは「音」に関して優れた修行者がいたということを象徴的に述べていると考えることができます。

また目出たいことが起る兆しとして、大地が震動してこれを告げると述べるところに「六種の震動」ということが出てきます。動・起・涌・撃・震・吼がそれぞれありますが、はじめの三つは形を表わし、あとの三つは音を表わしています。その次にありますのは「正覚の高音は響、十方に流る」であります。これは良く知られている嘆仏偈の一節であります。如来の覚りを述べる声はどこまでも響きわたって宇宙の隅隅にまで遍満するということを云っています。

また「清風、時に起りて五つの音声を出し、微妙の宮商、自然にあい和す」は、仏教と音楽について語られるときによく引用さ

れる有名な言葉であります。しかしこの部分について私は、これまでの一般の説明とは少々異なった解釈を持っております。といいますのは、この宮商とはご存知のように宮・商・角・徴・羽という中国の音楽の音階音の名前でありまして、宮商は隣り合った音ですから一緒に響けば、とても濁った響きになるのであります。あい和すどころではありません。ではなぜ「宮商あい和す」のでしょうか。多くの方々は、現世では濁るこの二つの音も、極楽浄土では溶け合い、あい和すというように読まれているのですが、これは少々無理があると思ひます。すなわち宮商とは宮商角徴羽を象徴的に云っているのであって、丁度洋楽でもドレミファソラシドのことをドレミと云い表わすことがあるように、一部分で以って全体を云い表わす手法だと思ひます。つまり五つの音でできている音楽が溶け合った響きをし、心を柔らげてくれるということ云々していると考えるのであります。

これによく似た表現に、他の經典に「神鸞の響」というのがあります。もちろん神鸞(太平の兆として出る神鳥)または鸞(鳳凰の一種)の発する声と読むこともできますが、神仙(洋楽のC音に相当)と鸞鏡(B音)とで十二律を代表させた表現と見ることもできると考えます。

また無量寿經には「耳根は清徹にして」「六根は清徹にして」という言葉がありますが、釈尊や如来の説法を聴いて受けとる側が、どこまでも澄んだ耳と心とで心の底まで聴きとることを意味しています。ところが、これを釈尊の説法の声の響きに当てはめる、すなわち音声の送り手とその響き自身におき換えて考えてみることもできるのではないのでしょうか。そうすることによって仏教音楽の理想的な響、姿としてこの「清徹」を考えることができ

るのではないでしうか。実際、そのように考えた方のおられることを知って大いに意を強くしている次第であります。

次に「世間の帝王に百千の音楽あり（しかるに）転輪聖王より、ないし第六天上の伎楽の音声は（世間のそれと比して）展転してあい勝ること千億万倍なり。第六天上の万種の楽音も、無量寿国のもうもろの七宝樹の（出す）一種の音声にしからざること（その差）千億倍なり。また（仏国土に）自然の万種の伎楽あり。またその楽の声は、法音にあらざることなし。清揚・哀亮にして、微妙・和雅なり。十方世界の音声の中、（これを）最も第一となす」とありますが、この部分は無量寿経の中で音楽について最も深く立ち入った部分であります。ここに出てくる「清揚」は、他の訳では「清暢」となっているものもあります。この表現は浄土における音楽の響きについて述べたものでありますから、これを至尊の音声、理想的な響きと考え、「清徹の響き」を云い表わしていると理解することができるとは思いません。

ではここで中国の声明をお聴きいただきたいと思えます。曲は「香讚」といい、勤行や儀式の始めにお香を焚く時に唱えます。上海の龍華寺での録音であります（譜例3）。

さらにつづいてチベットのラサにありますがセラ寺で、とくに調査団のために勤めていただいた勤行の様子をお聴き下さい。二人一組で吹くギャリン（チャルメラ類）や、長大なホルンのドゥーンが演奏されるのが特徴的であります（譜例省略）。またつぎは韓国慶尚南道の海印寺の勤行であります（譜例省略）。

ここまで仏教音楽を聴いてまいりました、その音楽を経典の中ではどのように取り扱い、取り上げているのかということを見てまいりましたのでありますが、その一つ無量寿経は極楽を音楽の世界

譜例3 『仏教念誦集』（一九八〇年上海市仏教協会編）八四頁より。

図版Web非公開

として説いている経典であると云っていいと思うのであります。

このあたりで再びキリスト教の音楽に目を向けたいと思えますが、ご存知のようにキリスト教の根本聖典は旧約聖書と新約聖書であります。新約聖書の中心テーマはキリストの誕生から説法を経て受難、そして復活にいたる経緯が述べられているのでありますが、その中には意外と音楽に関する直接的な記述はほとんど見当たらないのであります。これに対して旧約聖書は、キリスト教の立場から云えばキリストの出現を準備した長い時期について述べたものであります。こちらの方には音楽についての記述は豊富にみられるのであります。中でもそれ自体が歌われるために作られたと考えられます「詩篇」という部分がありまして、そこには一五〇首の讃歌が集められていますので、その中からいくつかを

取り出してご紹介したいと思います。

「……その響きは全地にゆきわたたり、その語りかけは地の果てまで及ぶ……」(一九A)。これは神の声の響きについて述べたものです。「神ヤハウェの掟は清く、言は潔からで……」(一九B)は、神との語らいの場の清潔であることを述べています。また、「歌をうたい、鼓を鳴らし、妙なる琴と堅琴をかきならせ。新月と満月、われらの祭りの日にラッパをふきならせ。これはイスラエルの定め、ヤコブの神からのおきてである」(八二)では、楽器が登場します。「よいかな、ヤハウェをほめ、いと高き者のみ名を歌い、十絃の琴と堅琴と琵琶の妙なる音を用いるのは」(九二)や「全地よ、ヤハウェに向つて声をあげ、歓呼して喜びかつ歌え。ヤハウェを琵琶をもってたたえ、琵琶にあわせて大声に歌え、ラッパと角笛の音にあわせて、王ヤハウェの前に声をあげよ」(九八)では楽器の数が増えます。さらに「ヤハをほめたたえよ、ヤハウェに向つて新しい歌を歌え、神を敬う者の集いで讚美の歌を輪舞をもってそのみ名をほめたたえん。彼に向つて歌え、鼓と琴をもつて」(一四九)や、「そのラッパの響きをもって、鼓と輪舞をもつて、笛と絃とをもつて、鏡鉦を打ちたたいて、鏡鉦を鳴り響かせて彼をほめたたえよ」(一五〇)は、神を讃える際に音楽をもってせよ、ということ云々を云っているのであります。ここで注目すべきことは、キリスト教の場合、音楽を演奏したり歌ったりするのは、この地上の人間であるということです。この点、仏教の經典が、音楽は天上界の天人が行なうと述べていると極めて対照的であります。また、キリスト教では天国でどのような音楽がどのように演奏されるのかについても記述は見当りません。すなわ

ち、聖書に出てくる音楽は極めて現実的、この世的であり、音楽の演奏目的も神がその敵に打ち勝ったことへの讚美が中心であります。敵とは神との契約や掟にそむいた者や異教徒たちのことでもあります。さらに、仏教經典に出てくる「風」が、樹樹の小枝をそよがせて自然の音楽を奏でるのに対し、聖書の「風」は神にそむくものを打ち破り、こらしめるために大地を砂漠に変えたり、雲を呼んで大雨を降らし洪水を起すために吹くのであります。その激しさや攻撃性は仏教のそれと極めて対照的であります。

それでは今日、私たちが聴くことのできるキリスト教の音楽が非常に戦闘的で敵を打ちくだくというような迫ってくるような音楽であるかどうかといえますと、むしろ非常に澄み切ったところの、天上から聞えてくる音楽とはかくの如き音楽であろうかと思わせるような、そういう正に「清徹の響」とはこのような響を指すのだという響きをそこから私は感じることができるのであります。このことは一つには、旧約聖書の時代から新約聖書の時代への推移、そしてグレゴリオ聖歌の時代から天国論や天使論を含む神学の発展と無関係でないと思います。とくにルネサンス期に芸術家たちの創造力をかきたてた天使と奏楽という想像の世界の所産として考えることができると思いますが、キリスト教はこの見事な財産を手に入れることに成功したのであります。

話は変わりますが、最近、京都会馆でアマチュアの合唱団によるバッハのマタイ受難曲、これは全曲三時間に及ぶような大曲ですが、その演奏会がありました。そして満席の聴衆を終始くぎづけにしたのであります。聴衆の大部分はクリスチャンではないと思うのですが、なぜ異教徒の心まで握んで離さないような力、それ

を力と呼んでも良いと思いますが、それが一体どこからきているのかと云うことですね。聴衆は恐らくその中に清徹の響を聴きとり、心の底に届いて握んで離さないような、そういう魅力を感じたからではないかと、このように思うのであります。一方、仏教の法要儀式で唱えられている声明が、そういう魅力を今日まで持ち続けているかどうかということを、一つの問いかけとして考えざるを得ないのであります。

キリスト教の教会音楽が、今日までヨーロッパ音楽の太い柱でありつづけているについては、教会音楽そのものが非常に高い演奏レベルを保ち続けてきたこと、僧職の人たちが音楽にかける情熱、その速度な態度がその根底にあるのではないのでしょうか。ヨーロッパ各地をめぐってその感をいよいよ強くしたのであります。どんな寒村の小教会においても神父が、そのミサにおいて聖書を読むひと声、讃歌の一つの音に、その儀式の成否をかけているかのような真剣な態度がひしひしと伝わってくるのであります。

このようなわけで、私がまわりましたヨーロッパの教会の中でもっとも感動しました例をご紹介しますと思います。これはライン河畔の町ヴィースバーデン郊外の寒村キードリヒの教会のミサでうたわれた「キリエ」であります。うたっているのは同村在住の少年たちでありまして、毎日のように学校からの帰りに教会へ来て二・三時間の練習をした後、家に帰るといふ厳しい練習をつづけています。この合唱団は実はローマ法皇庁の助成を受けているのですが、その割には余り知られておりません。私もここを訪れた数少ない日本人の一人であります。そして何よりもその歌のすばらしさは居合わせた者の心をとりこにせずにはいられないものであります(譜例4)。

譜例 4 『Kyriale Kideracense』(1977年 Chorstift Kiedrich 刊) p. 57 より。

図版Web非公開

いままで聴いてまいりました仏教音楽とキリスト教音楽についても思うことでありますが、仏教音楽がこれからどういう発展を上げていくのであろうかということであります。このことについては多くの人たちが模索しているところであります。少し古いですが昭和十四年に、藤井制心という方と、著名な詩人の萩原朔太郎とが中外日報という宗教専門紙上で大論争をしたことがありますが。藤井制心が自分の主宰し指導する合唱団を率いて、ラジオで仏教讃歌を放送したのに対し、あれは仏教音楽でない、キリスト教音楽の模倣にすぎないと萩原朔太郎がみついたのであります。論争は何回かに亘って戦わされましたが、もちろん決着がついたわけではありません。むしろこの論争は今日的課題でもありつづけています。しかし、この論争で欠如していたのは、伝統的な仏教音楽すなわち、各宗派各寺院が営営として伝えてきた仏教音楽それ自身が、果して現代人の心をとらえるような魅力あるもので

あるのかどうか、音楽として本当に魅力を持つかどうか、持たせることができるのかどうかということでありました。このことこそ最も肝腎な点であり、議論の出発点にならなければならないと考えるものであります。その上に立ってこそはじめて新しい仏教音楽の将来が拓けてくるのではないかと思います。

かつてインドや中国で、清徹の響として仏教音楽が考えられていたその時代には、国際的な宗教音楽の世界が展開していたのでありますから、日本において再び東西の音楽がめぐり会って、新しいものを互いに影響し合って作りあげていくことは歴史の流れでありましょう。この時期にあたりもう一度繰り返しますが、これまでの伝統的仏教音楽がその柱にならなければならないのではないかと私は思うのでありまして、今日はその考えの一端を述べさせていただいた次第であります。ご清聴ありがとうございました。